3 一般社団法人マルゴト陸前高田　岩手県 陸前高田市
被災地×交流人口＝無限大の可能性

Point ▸ 取組のポイント

［ヒト］
地域の力を信じることから始める

［着眼点］
このまちならではの学びで「きっかけ」づくり

［連携・協働］
地域に主体的に関わり続けるアクションを

［持続性］
陸前高田の可能性が育ち広がる仕組み

DATA

Area ▸ エリア

岩手県陸前高田市

Player ▸ 取組主体

一般社団法人マルゴト陸前高田

Project ▸ 取組の内容

地域資源を活かした「学び」をつくり、継続的に関わる人口を増やす

Profile ▸ 人物紹介

理事
越戸浩貴（こえと ひろたか）

岩手県久慈市出身。岩手大学及び同大学院で倫理学・社会哲学を学ぶ。大学院在学中に東日本大震災が発生。ゼミや大学の復興支援活動などで陸前高田市に関わる。マルゴト陸前高田の前身組織の立ち上げに携わり、2016年4月独立時に理事に就任。

地域をつくる!
新しい交流人口のカタチ!

［ヒト］

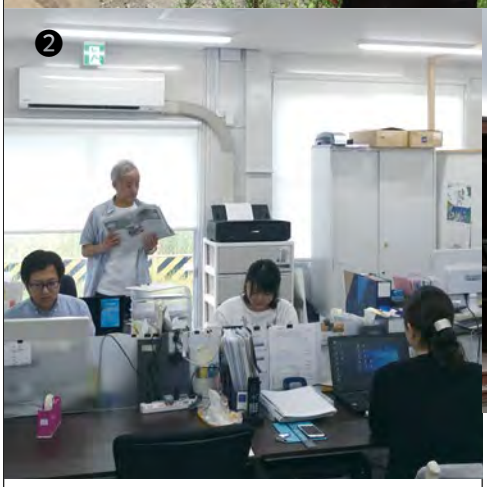
地域の力を信じることから始める

陸前高田市の交流人口拡大を目的とする一般社団法人マルゴト陸前高田。その前身は2014年に陸前高田市の観光物産協会内に発足した「まるごとりくぜんたかた協議会」だ。2016年4月、これを社団法人化、人員を強化して活動をスタートさせた。

理事である越戸浩貴さんは、2014年の発足当時からこの事業に携わってきた。越戸さんは同じ岩手県でも県北に位置する久慈市出身だ。岩手大学の大学院に在籍中、東日本大震災を経験した。ゼミや支援活動で沿岸部の復興に携わるなかで、陸前高田市を応援する学内の有志のチームを結成。それが陸前高田との関係の始まりだった。

仮設商店街のオープニングイベントの企画や、まちの動きを市外に発信するための冊子の作成などの活動を通して、地域の人の持つ底力を肌で感じた。そこにはいわゆる「被災地」というイメージとはかけ離れた力強さや温かさがある。自分たちがこれからのまちを創っていくんだという人々の気概に触れるうちに、越戸さん自身もこの地域に携わる仕事をしたいという思いが膨らみ、2013年9月に陸前高田市に移住してきた。

何をすべきかわからないまま、まず陸前高田と東京を、物産を通じてつなげ



❶ 陸前高田市全景　❷ マルゴト陸前高田の事務所
❸ 事務所がある一本松茶屋

被災した岩手県陸前高田市の人口は2万人を切り、現在も減り続けている。交流人口に留まらない、地域に関わり続ける人口を生み出すことが重要だ。マルゴト陸前高田は、「被災地だからこそ提供できる学び」があるとし、まちづくりの要として、市内外をつなぐ活動を続けている。

るためのイベントに従事した。どのようなカタチで交流人口を増やすべきか。その時点での輪郭はまだおぼろげだったが、「地域の人の力を信じる、そして最大限に引き出す」ことがこれからの自分の役割になるということは確信し、行政や観光物産協会の協力を得ながら協議会の立ち上げを始めた。

［着眼点］

このまちならではの学びで「きっかけ」づくり

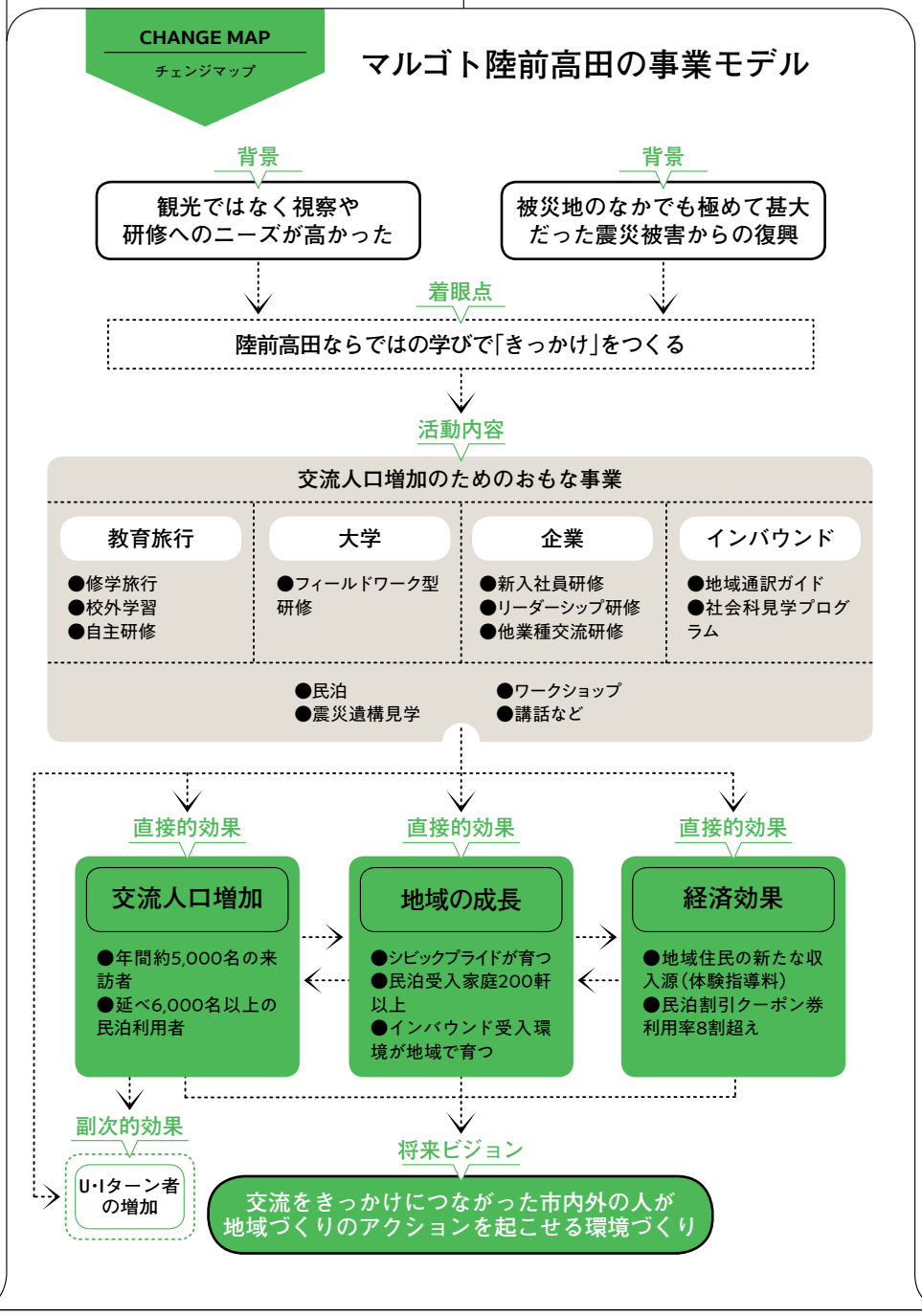
陸前高田市は太平洋に面し、東北でも温暖な気候の土地だ。東日本大震災以前は、国の名勝にも指定されていた高田松原を有し、多い時には年間100万人を超える観光客が訪れる観光地として賑わっていた。しかし、震災で7万本あった松原も1本を残し、津波がすべてを流してしまった。市内人口の7%を超える尊い命が失われ、全8,069世帯の99.5%が被害に遭った。市内に残るかつての道の駅や中学校は、市の指定する震災遺構として、いまも当時の悲惨さを静かに伝えている。

「奇跡の一本松」から僅かな距離に事務所があるマルゴト陸前高田は、「このまちの可能性が、生まれ育つ未来を創る」というミッションを掲げている。教育旅行・大学・企業研修・インバウンドという4つの部門から成り立ち、震災遺構のガイドや農家民泊の受入を通して、交流を生み出している。被災地の悲しい経験だけを伝えるのではなく、陸前高田市が本来もっている伝統、歴史、自然、産業、人を大切な資源とし、今後のまちづくりや未来の姿を伝える学びの場を提供している。

マルゴト陸前高田を介した訪問者は年間を通して5,000名を超えているが、そこではただの交流だけではなく、「陸前高田に関わり続けるきっかけ」をつくり出していた。

2016年から開始した農家民泊は、このまちならではのオリジナルなプログラムとして地域に定着しつつある。年間1,500名が訪れる修学旅行では、主に関東から来る中高生が一般家庭に宿泊し、家庭の生活をともにする。家庭での過ごし方はそれぞれに委ねられており、りんご畑で収穫体験をしたり、漁船で沖合に出たり、時には震災当時の話を聴くこともある。初めてこの場所を訪れる生徒も、帰り際には受け入れ家庭と涙を流しながら抱き合い、別れを惜しみ、本当の家族のような関係になっている。

陸前高田の民泊では、「心の振れ幅が生まれる出会いと経験」を大切にしている。震災の絶望や悲しさと、そこで強く生きている人々の希望や力強さの対比は、訪れる人の心に深く刺さり、リアルな体験として記憶に残る。帰ってからも手紙の交換を続けている人たちも多く、修学旅行で訪れた高校生のなかには卒業後、この地への移住を考える生



❶ 教育旅行・民泊での集合写真 ❷ 震災遺構を見学する中学生 ❸ 日本、メキシコ、ベトナムの大学生共同プログラム ❹ 講話を聞くバングラデシュからの旅行者 ❺ 企業の研修旅行でわかめ作業体験

徒も出てきている。

「普通の観光地ではなく、自分の生き方に目を向けさせられるこの地だからこそ、次のステップにつなげることができる」と、話す越戸さん。

「高田オリジナルなプログラムを作る」ことは、さまざまな人を陸前高田とつなげている。JICAの外国人職員やアメリカの自治体職員は、防災とゼロからのまちづくりを学ぶために、市内視察と民泊を行った。言葉が通じないことがほとんどだが、「一緒にご飯を食べて、一晩ともに過ごせば打ち解けあえる」と、受入家庭は話す。

ほかにも、日本と海外の大学生が協力して地域の魅力を見つけるフィールドワークを行い、地元住民に発表する場をつくったり、関東に本社を置く部品メーカーが仮設住宅の住民と交流芋煮会を行い、物資の提供をしたりと、まちと深い関係をつくることを大切にコーディネートしている。

［連携·協働］

地域に主体的に関わり続けるアクションを

事業開始から2年が経ち、マルゴト陸前高田の活動の主軸へと成長した民泊事業は、行政と市内のNPO法人と協働することで安定を保っている。回覧板や市内広報などを活用した市全体への告知を行政が担い、特定の地域への広報活動などはその地に特化したNPO法人が受け持つ。その全体統括を行っているのがマルゴト陸前高田であり、まさに市内を〝まるごと〟連携させているのだ。

そのうえで常に新しい視点を取り入れ、連携を強化させている。商店などの市内の事業者に協力を仰ぎ、民泊を受け入れている家庭限定に発行している割引クーポン券は利用率が8割を超え、市内の経済循環を生み出している。

また、人との交流を生み出す民泊は育児によい影響を与えると期待されている。マルゴト陸前高田のスタッフが、子育て世代の家庭を対象とした地域イベントに参加し、多くの家庭に受入参加を呼びかける。ほかにも市公認の通訳ガイドと連携し、海外からの訪問者への対応体制も整えており、今後のまちづくりを見据えた仕組みづくりを行っている。

市外から訪れた人が地域とつながり続ける例もある。企業の研修の一環として「陸前高田に関わるきっかけ」を得た人たちが、研修終了後も個人で陸前高田を訪れ、約15年間開催されなかった盆踊りを地域の人たちとともに復活させた。さらに、民泊活動自体が「地域住民のシビックプライドを育んでいる」と、

Data ▸ 本事例の問合せ先

マルゴト陸前高田
所在地：岩手県陸前高田市
HP: http://marugoto-rikuzentakata.com
主な事業内容：教育旅行/企業、大学、インバウンド事業の誘致、コーディネート/民泊推進事業

Area ▸ エリア 岩手県陸前高田市

COLLECTIVE IMPACT
コレクティブ・インパクト

マルゴト陸前高田の連携・協働の図

行政
- ●交流人口拡大事業の業務委託（陸前高田市）
- ●市内外への広報（陸前高田市）
- ●講話、研修受入（陸前高田市）
- ●市内DMO組織（観光経営会議）

民間企業
- ●民泊割引クーポン券（熊谷精肉店、八木澤商店、神田葡萄園、キャピタルホテルなど）
- ●観光コンテンツ開発、受入（漁業協同組合、農業協同組合など）
- ●営業協力（株式会社&Nature）
- ●障がい者スポーツ大会合宿の誘致（各種関連団体）

支援団体
- ●民泊受入体制（NPO法人SET）
- ●体験コンテンツの開発、市内の情報収集（陸前高田NPO協会）
- ●移住定住促進（NPO法人高田暮舎）

地域
- ●民泊受入（地域住民）
- ●各種体験受入（地域住民）
- ●地域通訳ガイド（地域住民）

マルゴト陸前高田

陸前高田市内外で交流
- 中・高校生
- 大学生
- 企業
- 海外からの来訪者

大学の教授が論文を執筆した。市外の人であっても陸前高田を自分のフィールドとして主体的に地域に関わり、アクションを起こすことで仕事やプロジェクトが生まれているのである。

陸前高田市民にとっては、新しい視点や知恵を借りながら地域づくりができるため、双方にとってメリットが大きい。常に相互作用することにより、決して一度きりの交流に留まらない連携と協働を生み出し続けている。

［持続性］

陸前高田の可能性が育ち広がる仕組み

現在の運営は公的資金に負う部分が大きいが、事業としての自走化も目指す。2年間でコーディネートした民泊は延べ6,000人以上。受入家庭も約200軒まで伸び、民泊事業は好調だ。

また、世界的な防災意識の高まりを活かし、インバウンド誘客も積極的に進め、こちらも受入実績は着実に増えている。

陸前高田だけのオリジナルな体験を軸に交流人口を増やす。そこから市内外の人々が陸前高田を舞台に主体的なアクションを起こす。その先に目指すのは「高田の可能性が生まれ育つ未来」だ。「『生まれる』だけでなく、『育つ』ことが、この事業の発展のカギ」だと、越戸さんは話す。

具体的に、交流人口から端を発して、さまざまな可能性が動き出している。移住定住人口の増加、市内観光関係者と連携した観光経営チームづくり、大規模な障がい者スポーツ大会の誘致など、近い将来のものから数年先の未来のものまで展開は幅広い。

それらを実現するには「つなぐ」ことが重要だ。市内と市外をつなぐこと、さまざまな事業者とつながること（協働）、陸前高田の未来へつなぐこと（次世代）、市外に価値を分かち合うこと（地域間連携）だ。

マルゴト陸前高田が〝要〟となり、交流人口から新しい可能性を生む。その可能性が陸前高田で育ち、オリジナルなまちがつくられていく。そのオリジナルなまちの営みが、再び交流人口の呼び水になる。その好循環（サイクル）を作ることこそが、事業の発展的な継続性のために重要になる。